

城のある都市復活

福岡城だより

2011.10

OCTOBER

No. 31



大工の夢・工芸展 中神文雄氏 福岡城天守閣模型

「鴻臚館・福岡城跡」は

福岡の宝

福岡市中央区役所区長 吉田 恵子



福岡市は、アジアのリーダー都市を目指して、都市の魅力に磨きをかけ、活力にあふれるまちづくり、歴史や文化、自然など都市の魅力を生かした都市づくりを進めているところです。

そのような中で、鴻臚館跡や福岡城跡のある舞鶴公園は、歴史・文化と自然が調和した都心のオアシスともいえる環境を醸し出しています。

中央区役所としましては、都市部における貴重な国史跡の歴史文化資産であります鴻臚館跡や福岡城跡の積極的な活用を図り、多くの市民や来街者が直接訪れ、触れることができる機会の提供や他の観光資源と回遊性を持たせる仕組みづくりなど、もって福岡を楽しめるまちづくりを進める必要があると考えているところです。

中央市民センターでの「福岡地域史講座」の開催や市政だより（中央区版）での「舞鶴公園さんぽ道」の掲載などにより、市民の皆様には「鴻臚館・福岡城跡」を広く知ってもらい、身近でかつ他の都市にない「福岡の宝」と感じてもらえるよう、取り組みを進めています。

また、歴史や文化に関わる市民の皆様の取り組みはとても重要なものであり、貴会の「福岡城散策マップ」づくりや「福岡歴史観光市民大学」など、様々な活動に感謝申し上げます。

今後とも、貴会をはじめとした地域団体と連携・協力しながら、魅力あるまちづくりに努めていきたいと考えておりますので、ご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

「福岡城・鴻臚館の将来に向けた市民参加プロジェクト」スタート!!

※これまでの経緯

昨年、平成二二年三月から十一月にかけて、「福岡城活用」の官民共働勉強会が開かれました。福岡市役所、福岡商工会議所、企業等並びに私どもNPOのメンバーを構成員とする、これ自体画期的な会で、事務局は市教育委員会文化財部が、座長は当会理事長があたり、学識経験者などと呼んで、数回の勉強会、二回のシンポジウム、福岡城、熊本城の現地調査などを行いました。福岡城がこのままだでは「勿体無い」という共通認識が得られたと同時に、数多くの課題も山積していることも解ってきました。

本年に入り、この勉強会を発展的に模倣替えして、実行委員会に格上げし、この貴重な「福岡城・鴻臚館」という、市民と地域の財産をどう活用したら良いかという視点を出発点にして、行政・民間協働で検討し活動していこうということになりました。また最近の国の方針である「新しい公共」のモデル事業として申請し、このほど内閣府の意向を受けた福岡県において採択され、これから精力的に活動することになりました。

※「新しい公共」の理念

平成二〇年度にスタートした「国土形成計画」(従前の新全国総合開発計画に相当する「一〇年ビジョン」で打ち出された概念で、従来「公」的な業務はもっぱら「官」が主体になって推進してきましたが、これからはNPOのような「民」が「官」に代わって、あるいは「官」と協働で行うものがあるべきで、そのようなモデル事業を国が支援することになり

ました。またその場合、他の組織体に較べて、財政や人的体制で弱いNPOを育成するという趣旨もついており、「新しい公共支援事業(新しい公共の場づくりのためのモデル事業)」として平成二三年九月十五日に福岡県で決まりました。

※実行委員会の発足とプロジェクトのスタート

前述の官民共働勉強会の構成員を中心に「福岡城・鴻臚館の将来を市民と考える実行委員会」が去る平成二三年五月十一日に結成されました。事務局は当NPOがあたり、福岡市役所の担当窓口は構成員である経済振興局集客交流部となりました。

※プロジェクトの基本的な考え方

「天神に隣接する八〇万㎡(大濠公園なども含め)の都心一等地をこのままで良いのか!」が素朴な出発点です。国の指定史跡になって五〇年もたつのですが、「活用しないと勿体無い」「このままほっておくと鬱蒼とした樹木で史跡の遺構も見えなくなったり、石垣が破壊されたりして荒廃する」これに対して整備するにしても「市民の盛り上がりがないと前に進まない」というのが実態です。一方市民は「城の存在すら知らない」「行ったことがない」それでいて「来訪者を連れて行くところがない」という声です。福岡はそんなことはない、素晴らしい歴史・文化も食文化・お祭もあるのに、どうも「福岡市は観光都市ではない」「観光都市として外の人々がすぐに思いつくシンボル、ランドマークがない」というこ

とです。そこで史跡「福岡城・鴻臚館」のダイナミックな活用によってまちづくり・観光浮揚等の地域活性化をめざすことにします。まず「市民が福岡城・鴻臚館を知る」「市民・来訪者が楽しむ」「市民が考える」そんな場づくりと実行から始めます。

新幹線博多駅が三十六年ぶりに途中駅になり、この半年の実績でも、関西地区の九州入り込み観光客が大幅に増加しているのですが、皆さん福岡を通過して熊本、鹿児島地区に行っています。東日本大震災も発生し観光が冷え込んでいますが、離れた九州から観光産業再興も課題です。

※プロジェクトの実行計画

三つの事業を実施いたします。

その一・福岡城・鴻臚館を市民が知るための事業

エリアや周辺も含めて、解説付きまち歩きツアーを多くの市民向けに企画して、楽しんでもらう、識ってもらうことにします。

その二・福岡城・鴻臚館を福岡市のまちづくりにつなぐ仕組みづくり

既存の「お濠端会」(当NPO開催)や周辺校区等の地区協議会や商店街とも、中央区役所とも一体になって連携し、それぞれの地区の活性化と同時に福岡城・鴻臚館をどうしたら良いかも考えることにします。

その三・エリアの将来のあり方を広く市民と考える、産・学・官・民の施策、活動に反映させる事業

具体的には「市民が学ぶフォーラム」と「市民が考えるフォーラム」を開催します。アンケート調査なども行います。

「福岡城・鴻臚館の将来を市民と考える実行委員会」の委員・監事

平成 23 年 10 月 5 日

会長	委員	石井 幸孝	(NPO 法人 鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会)
副会長	委員	磯村 正人	(西日本鉄道株式会社)
	委員	江藤 剛	(社団法人福岡青年会議所)
	委員	岡嶋 洋一	(財団法人福岡観光コンベンションビューロー)
	委員	濱田 史郎	(九州電力株式会社)
	委員	藤尾 浩	(福岡市教育委員会文化財部)
	委員	洲上 哲郎	(福岡市経済振興局集客交流部)
	委員	松本 法雄	(財団法人福岡アジア都市研究所)
	委員	右田 喜章	(株式会社ホークスタウン)
	委員	三角 薫	(福岡商工会議所)
	委員	吉田 恵子	(福岡市中央区役所)
	監事	田中 寛治	(田中公認会計士事務所)
	監事	寺崎 慎一	(福岡銀行)
事務局長		岡部 定一郎	(NPO 法人 鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会)

史跡も50年経つと森林に覆われ 見えない 破壊が進む



すぐそばの天守台が見えない

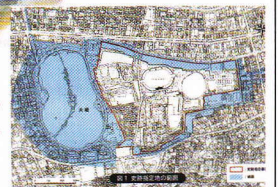
天守台



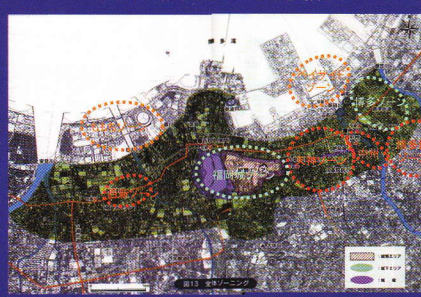
福岡城絵図
宝暦7(1757)年

福岡城郭の現状
完璧に残っている
全国的にも珍しい

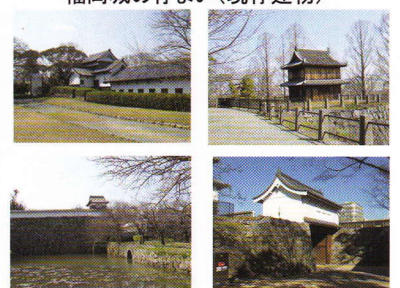
いずれも
福岡市教育委員会資料より



広大な福岡城下町(惣構)



福岡城の佇まい(現存建物)



櫓シリーズ

花見櫓

その歴史の流れの中にあつて、武人達が四季の歳時の移り変わりを愛でながら行事化し、慶びとして有職故実、儀礼化することによつて櫓の役割が別の意味を持つこととなる。

その一つが月見櫓である。明治になって黒田家の菩提寺である崇福禅寺に移築され、経文倉として残されていたが、その昔は、天守閣下の本丸台地左隅にあつて、秋の夕月を楽しむばかりでなく、お茶を楽しみ、歌を楽しみ、高い身分の子弟の十五歳になつての加冠の儀等、豊穰豊作の秋の訪れを希い祈る櫓でもあつた。



武人の平常心を養うために、花鳥風月に親しむ心掛け、剛柔併せ持つ心を大切にした姿なのか、

自然の景観の中に学ぶ兵法の一つとして建てられたのかは不明だが、福岡城西三の丸の南西の一面に、当時大堀と呼ばれていた草ヶ江の入江をふさぎ、大きな堀として福岡城の西を守る自然を生かした処に、この二層の花見櫓は建てられた。

黒田家家訓の中に、黒田如水公の晩年の教え「兵法は平法なり」(なるべく戦を避け、政道を正しく、国を治めることが立派な兵法である)が明記されている。

和む心、自然と見つめ合う心、命を与えてくれる自然の真理、命の大切さを観る櫓なのか、自然現象として一番美しい景色ともいえる、玄海夕陽の西海に落ち行く景観も眺められる処である。

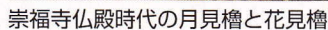
明治になって、黒田家の菩提寺である崇福寺に移築され、花見櫓と月見櫓の二棟をつないで、佛殿の教典を収納する倉庫として使用されていた。現在では、福岡市が調査解体し、やがての折

りに福岡城内の昔から建てられていた跡地に再
移築する予定と

なっている。建
てるとするなら
ば、今の市美術
館東詰の城内土
手盛りをしてい
る。



時代の月見櫓と花見



(記 福岡城市民の会事務局 岡部定一郎)

糸島市高田二丁目のギャラリー・イマジンハウ
スで七月十四日から二〇日まで「大工の夢 工芸
展」が開催されました。

宮大工の経験をお持ちの糸島市大門の中神文雄氏（二級建築技能士）が福岡城の天守閣をイメージした模型を完成させ展示。

熊本県出身の中神氏は当初熊本城の模型を制作予定でしたが福岡市の日氏の熱意にほだされて福岡城を制作されたと聴きました。

七月十四日に「市民の会」のメンバーは工芸展を見学しました。中神氏に会場を案内していただき、九ヶ月を費やした模型の説明を受け、その細やかな工程に頭が下る思いでした。

その他五重塔などの作品も展示されており、ギャラリーでのひとときを満喫し帰福いたしました。



「福岡城・鴻臚館の将来を考える実行委員会」第一回委員会が十月五日（水）十三時三〇分より福岡アジア都市研究所会議室において開催されました。審議事項第一号／第六号議案を委員の方々に承認していただき無事終了いたしました。

「福岡城・鴻臚館の将来を考える実行委員会」第一回委員会が十月五日（水）十三時三〇分より福岡アジア都市研究所会議室において開催されました。審議事項第一号／第六号議案を委員の方々に承認していただき無事終了いたしました。

冒頭、委員長(会長(当会理事長)から、「国の施策である「新しい公共」は行政・民間の協働による、従来の発想にとらわれないスピーディな仕事の推進が趣旨であるので、特段のご尽力、ご協力をお願いしたい。」との挨拶がありました。

● 続いて、委員会組織、今後の業務の進め方及びスケジュール、予算計画、内規制定、定例会議などについて審議し、種々の意見がありました。この趣旨にもとづいて業務を進めることで承認されました。

●これから来年の三月に向けて、事務局の役目はすべての面での連携を密に取り合ってプロジェクトを進めていくこととです。



黒田奨学会の紹介

一 沿革

財団法人黒田奨学会は旧福岡藩内子弟の人材育成と学問奨励の目的をもって、福岡旧藩主黒田家より寄付された広大な別邸の土地建物（当時福岡市浜の町一五番地、現在福岡市中央区舞鶴三丁目一三六番）を基本財産として、大正四年十一月三日（一九一五年）設立。昭和四年五月二十一日（一九二九年）財団法人として許可された奨学会です。徳川時代には日本全国に大名小名合わせて二〇〇余の藩があり、明治維新以後これらの藩主により設立された育英会は多数ありますが、現在残っている育英会は殆どなくなり黒田奨学会は希有の存在です。この旧福岡市浜の町別邸は大名屋敷にふさわしい豪壮な建物で、現在残っており、国の文化財に指定されていたと思われませんが、惜しくも昭和二十年六月米軍の福岡市大空襲により焼失。戦後この別邸の土地は国に賃貸し福岡高等・地方検察庁、福岡法務局の庁舎が建てられ、この賃地料が本会育英資金に充当されました。昭和五十七年にこの庁舎は舞鶴二丁目五三〇に移転。当時の石橋理事長時代に隣接の法務局の国有地と交換分合により現在の面積となりました。原已冬理事長の時代にこの土地を西日本鉄道株式会社に賃貸することとし、賃貸契約を結び、その賃貸料収入により育英事業を行って来ましたが、西日本鉄道株式会社事情により、この土地の賃貸契約は平成十年六月三十日付で解約。同年七月一日から赤坂門駐車場（管理橋山不動産）を開設し、その賃貸料収入により育英事業を行い現在に至っています。

二 現況

(一) 総裁 黒田 長高

理事 十二名（理事長一名・副理事長一名・東京在住二名）

監事 二名

評議員 十名（東京在住一名）

顧問 若干名

(二) 業務 奨学生総数四十名

奨学金二ヶ月分（月額四五〇〇円）を一括し、奨学生又は保護者に面接の上修学状況を聴取し支給。会員・関係先の研究補助

● 奨学生研修

一 偶数月支給日／奨学生（代理保護者）本部事務所

二 四月／奨学生総会／奨学生・保護者合同研修

三 八月／瑞藤会総会・奨学生・OB

四 九月／京阪神在住奨学生研修（高野山）

五 十二月／東京在住奨学生研修

六 三月／奨学生卒業記念会

奨学生・保護者と直接面接懇談の機会を設け、理事・評議員が指導を行い交流を深めることにしています。

● 会報・瑞藤会会報を年二回発行し会員の消息・業務事項等の伝達を計ります。

三 事務所所在地

福岡事務所 福岡市中央区大名二二四一

サンライフ大名三〇八号

電話 七二二一〇五九七

東京事務所 東京都港区赤坂二二二二〇

ディアシティ赤坂東館二〇三三〇

（如水興産株式会社内）

概要以上の通りであるが、奨学生諸君に

対し奨学会の由来・旧黒田藩の歴史、或いは現在の世代に於ける奨学生の心掛けを説き、優れた社会人としての人間形成に努めています。

● 会員からのよもやま話……

「福岡城」城の外（天下御免の火消組）

二川 昭一

大濠から流れ出る黒門川（現在は蓋をされ車道になっている）の西側が唐人町である。この町には中年会と称する組織がある。毎年八月に成道寺境内（唐人町一丁目）に祭つてある「馬頭観音」の祭りを執り行う慣わしになっている。この時、各校区の消防団も参加して纏まり、梯子登りなどを披露する。なかなか勇壮なものである。この時に中年会の面々は、四角の紋の入った藍色の分厚い半纏を着用する慣わしになっている。嘗てはこれに風除団扇を打ちながかせていたようである。

四角の紋と団扇の言われは古く藩政時代の元禄初頭（約三百年前）に遡る。

当時、唐人町有志が集まり他町に先駆け火消組を組織した。火災時の消火活動、平時においては町内の世話などを任務としていた。特に城内火災時には常に一番乗りをし消火活動に奔走活躍した。

この度重なる活躍が時の藩主の目に止まり、遠くからでも同町火消組と分かるように半纏の背中の紋章と風除団扇を下賜され、「事ある時は、この出で立ちであれば城内立ち入り自由」との名誉ある言葉を賜った。団員達の高揚振りは如何ばかりであったか。これ以後、唐人町火消組は世間で「天下御免の火消組」と言われ団員達は若き女性達の憧れの的となった。この出で立ちで出勤すると、他は皆、道を譲ったほどの羽振りであったようである。

この時の紋章がのちに「角ツナギ印」と言われるようになる。また、このときの団扇を世間では「唐団扇」と呼んだ。

いよいよ「新しい公共・福岡県共助社会づくり事業」の認可を得て市民の会の新たな挑戦が始まります。九月から来年三月まで半年余り事務局にとって忙しい日々が訪れます。

新しい事業のネーミングは「福岡城・鴻臚館の将来に向けた市民参加プロジェクト」です。新しい公共の場づくりのためのモデル事業として官民共働の市民参加プロジェクト推進に向けて船出いたします。

この機会により多くの方々の応援をよろしくお願い申し上げます。また、当会の運営、開催のイベント等に関しましてご意見やご注文がございましたら、忌憚のないお声をぜひ是非お聴かせ下さい。これからも初心を忘れず精進して参ります。

編集・発行 鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-15 読売福岡ビル7階

TEL 092-716-8238 FAX 092-716-8254

HPアドレス <http://fukuokajokorokan.npgo.jp/>

E-mail fukuokajo@tos.bbq.jp

[デザイン・印刷] 城島印刷株式会社

福岡城市民の会

検索

編集・発行

鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-15 読売福岡ビル7階

TEL 092-716-8238 FAX 092-716-8254

HPアドレス <http://fukuokajokorokan.npgo.jp/>

E-mail fukuokajo@tos.bbq.jp

[デザイン・印刷] 城島印刷株式会社

福岡城市民の会

検索

編集・発行

鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-15 読売福岡ビル7階

TEL 092-716-8238 FAX 092-716-8254

HPアドレス <http://fukuokajokorokan.npgo.jp/>

E-mail fukuokajo@tos.bbq.jp

[デザイン・印刷] 城島印刷株式会社

福岡城市民の会

検索

編集・発行

鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-15 読売福岡ビル7階

TEL 092-716-8238 FAX 092-716-8254

編集後記

いよいよ「新しい公共・福岡県共助社会づくり事業」の認可を得て市民の会の新たな挑戦が始まります。九月から来年三月まで半年余り事務局にとって忙しい日々が訪れます。

新しい事業のネーミングは「福岡城・鴻臚館の将来に向けた市民参加プロジェクト」です。新しい公共の場づくりのためのモデル事業として官民共働の市民参加プロジェクト推進に向けて船出いたします。

この機会により多くの方々の応援をよろしくお願い申し上げます。また、当会の運営、開催のイベント等に関しましてご意見やご注文がございましたら、忌憚のないお声をぜひ是非お聴かせ下さい。これからも初心を忘れず精進して参ります。

新規会員名簿（平成23年9月30日現在）

正会員(個人) 原 中 誠 志

一般会員(個人) 竹 谷 節 子

編集・発行 鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会

〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-12-15 読売福岡ビル7階

TEL 092-716-8238 FAX 092-716-8254

HPアドレス <http://fukuokajokorokan.npgo.jp/>

E-mail fukuokajo@tos.bbq.jp

[デザイン・印刷] 城島印刷株式会社

福岡城市民の会

検索

